# ◆左京三条一坊七坪・東一坊坊間路の調査
## ―第269-5次

### 1　はじめに

店舗駐車場建設の事前調査。東一坊坊間路と左京三条一坊七坪東辺部にあたり、西隣に第242―8次調査区がある。調査面積は約400㎡、期間は7月1日～31日。

### 2　検出した主な遺構

奈良・平安時代のものは、東一坊坊間路と東西両側溝、七坪の東面築地や、西側溝から分流する斜行溝、土坑、溝がある。他には、弥生時代の溝を検出した。

**SF7045**　東一坊坊間路。包含層を除去した地山面で検出し、整地土等は確認できなかった。規模は側溝心心で約21.6mで、60大尺とすることができる。

**SD7050**　東一坊坊間路西側溝。幅は検出面で約5.2～6.0m、深さは約1.3m。層位は大きく4層に分かれ、下2層が奈良時代、上2層は平安時代以降の堆積。

**SD7055**　東一坊坊間路東側溝。幅約2.4m、深さ約0.4m。溝東肩には大量の瓦が堆積し、十坪の西面には遺構を確認できなかったが、築地があったと推定できる。

**SD7059**　西側溝から東南方向に分流する水路。この位置のSD7050内には、杭を打ち込んで丸太や木の枝、木の皮などで作ったしがらみSX7060がある。堆積土からは平城宮土器Ⅶに属する土師器杯が出土し、SD7059は平城京廃都後の水田耕作に関わる導水路と考えられる。SX7060からは上流から流れてきたと思われる人形が6点出土。

**SA7070**　七坪の東面築地。掘込地業か築成土と思われる黄褐色の粘質土がわずかに残る。東辺部にSS7064、西辺部にはSS7065の添柱列があるが、SD7065については後世の土坑、溝によって柱穴が失われている。そのため、築地の基底部幅は未確定だが、8尺前後と想定できよう。

**SK7057**　SA7070上にある土坑。平安時代以降か。中に川原石が2個入り、東南隅からは斜行溝SD7058がSD7050に向けて流れる。こうした状況からみて、便所遺構の可能性があり、堆積土を分析中である。

### 3　出土遺物

SD7050から大量の土器、瓦と木製品、木簡が出土。

**土器・瓦**　土器は奈良時代後半～平安時代のものが主体である。瓦は6316Dcなどの軒丸瓦9型式9点、6711AAなどの軒平瓦3型式3点があり、宮南面の所用瓦が多い。また、三彩平瓦も1点出土した。（玉田芳英／考古第2）

**木製品**　SD7050から人形8点、曲物側板片2点、曲物底板片2点、題籤軸片1点、部材1点が出土。人形6点がしがらみSX7060で集中出土した点に注目でき、人形3点を報告する(図40)。いずれもヒノキの薄板を切って人の正面全身を表す。1は両側縁の二等辺三角形の切欠きで頸部を表現、足は下端から切込みを入れ、折取って作る。頭部は山形、顔は墨描き。顔の約半分を欠損。現存長18.9cm、幅3.0cm、厚さ0.3cm。2は両側縁を浅く切込んで頸部を表現、足は切込みを入れ、折取って作る。頭部は丸い。破損のため、不明瞭だが顔面を墨描きしているらしい。現存長19.8cm、幅3.3cm、厚さ0.6cm。3は上部が長い三角形の切欠きで頸部を、長三角形の切欠きで足を表現する。約半分を欠損。現存長23.3cm、現存幅1.9cm、厚

①・□□　（右側面、左ガ天）
・諸陵寮　（表面）
・国月□　（左側面）
・□　（裏面）
・□　（上端木口）
(55)・25・(16)　011

②□　□右大秦乙麻呂
(248)・(15)・(5)　081

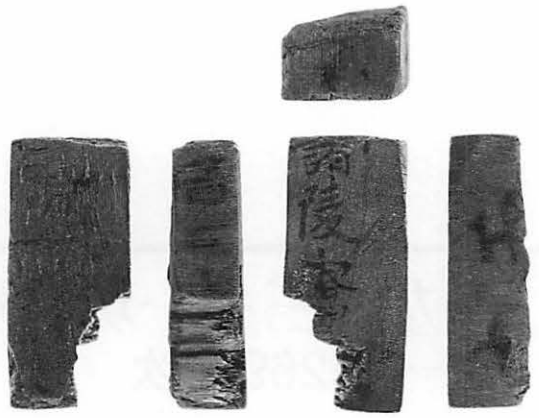

図38　SD7050出土木簡

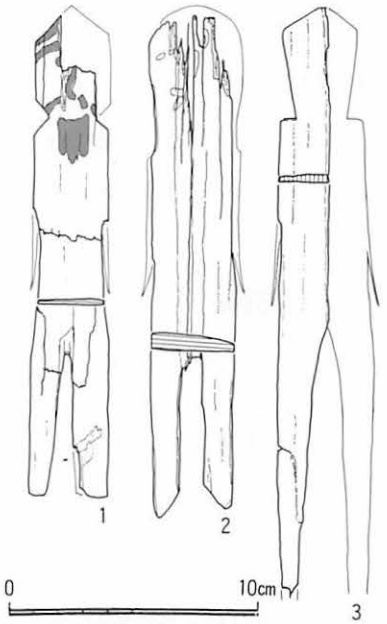


図40　SX7060出土の人形　1：3

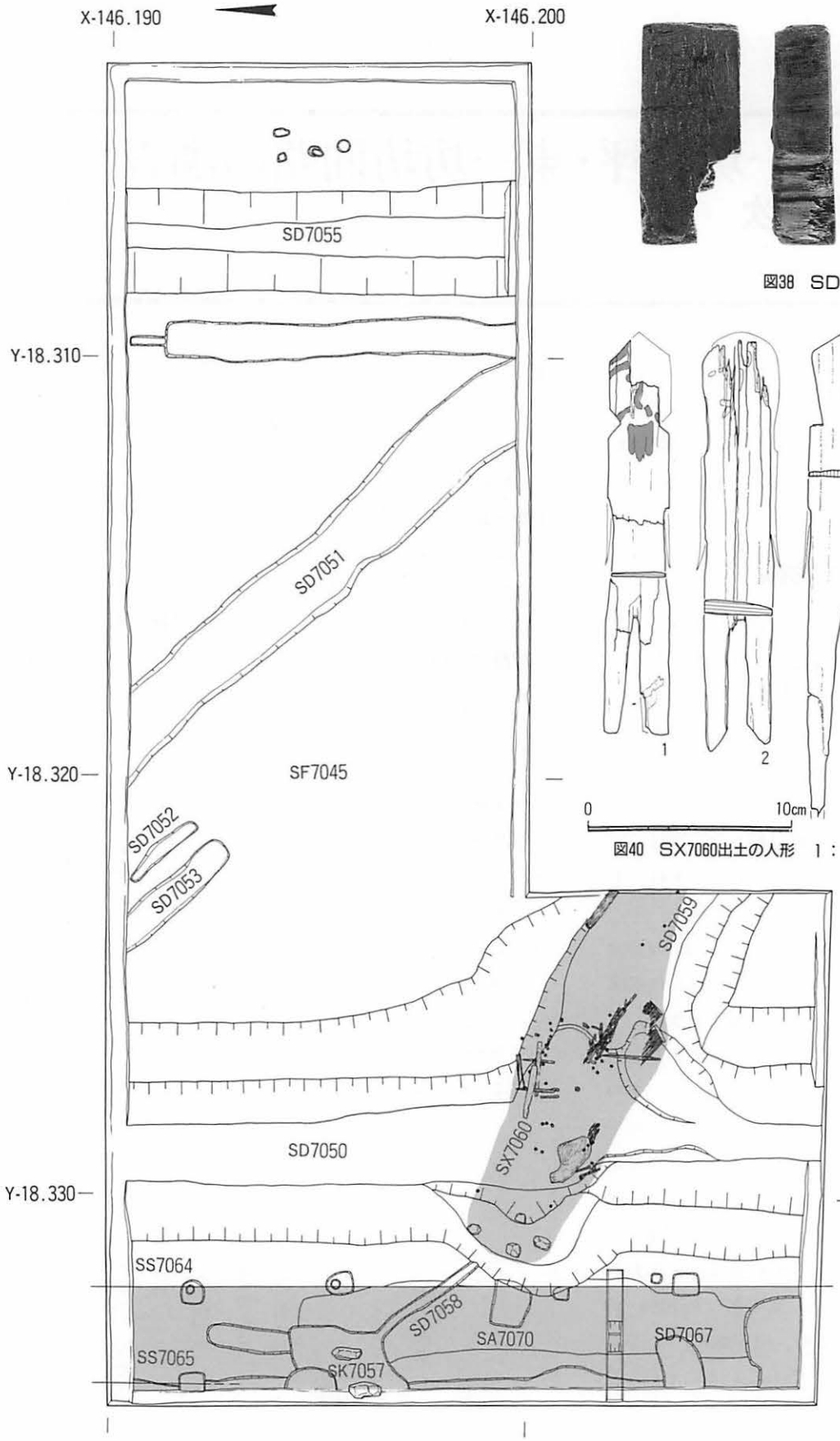


図39　第269-5次調査遺構図　1：150

さ0.3cm。なお、SX7060出土の人形には、ほぼ同形品が他に3点ある。

（臼杵　勲／考古第1）

**木簡**　SD7050から木簡10点（うち削屑3点）が出土。①の「諸陵寮」（図38）は、大宝令制における治部省諸陵司が天平元（729）年8月に昇格したもので（『続日本紀』）、これ以降のもの。

（古尾谷知浩／史料）

## 4　まとめ

今回の調査では、東一坊坊間路と東西両側溝を検出し、道路が側溝心心で60大尺の規模であることが判明した。これは、従来京南方で確認していた規模と等しい。また、平安時代の用水路や人形を検出、平城廃都後の土地利用の様相や平安時代初頭の祭祀の様相の一端が判明するなど、その成果は大きいと言える。

（玉田芳英）